様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２７３

研究課題名（和文）イギリスのカラーフィールド絵画の文化的背景に関する研究

研究課題名（英文）Cultural Context of British Color Field Painting

研究代表者
加治屋　健司（Kajiya, Kenji）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：７０４５３２１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：1950年代から1960年代にかけてのイギリスのカラーフィールド絵画の文化的背景を考察した。そのために、ロビン・デニー、リチャード・スミス、ジョン・ホイランドの3名のカラーフィールド画家に焦点を当てて、先行世代であるセント・アイヴズ派の抽象絵画やアメリカ現代絵画との関係を調査した。イギリスのカラーフィールド画家は、セント・アイヴズ派の抽象画家と異なり、主として展覧会を通して、抽象表現主義を始めとするアメリカの現代美術の展覧会に示唆を得て、作品の形式的な側面を重視しつつ展開したことが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、イギリスのカラーフィールド絵画を抽象絵画の国際的な展開の中に位置付けることで、1960年代イギリス美術の重要な局面を明らかにするものである。戦後イギリス美術史を修正して、現代美術の複数的な歴史を明らかにしつつ、現代美術がグローバル化する中でイギリス美術が果たした役割を明らかにする点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research investigated the cultural context of British Color Field paintings in the 1950s and 1960s. It focused on three painters, Robyn Denny, Richard Smith and John Hoyland, to examine their relationship with abstract paintings by St Ives School artists and American contemporary paintings. It revealed that British Color Field painters, unlike St Ives School painters, developed their paintings, chiefly via exhibitions of American contemporary art including Abstract Expressionism, with an emphasis on formal aspects of artworks.

研究分野：現代美術史

キーワード：イギリス美術　アメリカ美術　抽象絵画　カラーフィールド絵画

１．研究開始当初の背景

現代美術史はアメリカを中心に記述されてきた。アメリカの研究者による『現代美術の歴史』（H. H. Arnason, et al., *History of Modern Art*, 7th ed. (2012)）や『1900 年以後の美術』（Hal Foster, et al., *Art Since 1900*, 2nd ed. (2011)）といった主な現代美術の通史には、戦後イギリスの抽象絵画に関する記述がない。しかしイギリスのカラーフィールド絵画は、イギリス美術史においては重要な動向であり、2003 年にテート・リヴァプールで開催された「形式の状況：イギリスの抽象 1960–1970（Formal Situations: Abstraction in Britain 1960–1970）」展などの展覧会が開催され、個々の作家に関する論文が発表されるなど、再評価が高まりつつあった。

現在、2015 年にウォーカー・アート・センターで開催された「国際的ポップ（International Pop）」展、2015 年から 2016 年にテート・モダンで開催された「世界はポップになる（The World Goes Pop）」展に見られるように、現代美術のグローバル化の始まりとしてのポップ・アートに注目が集まっているが、戦後抽象絵画は、その前からグローバル化していたことに留意する必要がある。また、戦後抽象絵画は、ポップ・アートに先駆けて大衆文化と関係していたにもかかわらず、その関係は十分に注目されてこなかった。

イギリス抽象絵画に関する議論は、『1900 年以降のイギリス美術』（*British Art Since 1900* (1986)）や『イギリス美術の歴史：1870 年から現代まで』（*The History of British Art: 1870–Now* (2008)）など、もっぱらイギリス国内でなされることが多かったが、戦後イギリス抽象絵画は、アメリカ現代絵画と関係しながら発展したことに注目するべきであると考えた。イギリスにおけるアメリカ現代絵画の受容は、現代美術のグローバル化の問題を考える上で重要であるが、十分な調査がなされてこなかった。抽象表現主義の影響を受けたセント・アイヴズ派と、カラーフィールド絵画に示唆を得た次世代の違いなど、より詳細な考察が不足していると考えられた。

研究代表者は、アメリカのカラーフィールド絵画の研究を行ってきた。2003 年にモダニズム美術批評のグローバル化に関する論文を書いたとき、抽象表現主義に対するイギリスの関心と反撥を知り、それ以来、イギリスにおけるアメリカ美術の役割について関心をもつようになった。2014 年にニューヨーク大学に提出した博士論文では、カラーフィールド絵画の文化的な背景を考察したが、その調査の過程で、アメリカのカラーフィールド絵画もまた、1960 年代のイギリスで盛んに紹介されていることを知った。2015 年 10 月にロンドンで、ホイランドの作品を実見する機会を得て、アメリカのカラーフィールド絵画との類似性に興味を持つようになった。これまで行ってきたアメリカのカラーフィールド絵画に関する研究を活かして、イギリスのカラーフィールド絵画の文化的背景を明らかにできるのではないかと考えるにいたった。

２．研究の目的

本研究の目的は、1950 年代から 1960 年代にかけてのイギリスのカラーフィールド絵画の文化的背景を考察することである。そのために、ロビン・デニー（Robyn Denny）、リチャード・スミス（Richard Smith）、ジョン・ホイランド（John Hoyland）の 3 名のカラーフィールド画家に焦点を当てて、先行世代であるセント・アイヴズ派の抽象絵画との関係、アメリカ現代絵画との関係、ロンドンの都市文化との関係を調査することを目指した。

３．研究の方法

まず、セント・アイヴズ派の抽象画家で 1950 年代に活躍してカラーフィールド画家に影響を与えた画家として、パトリック・ヘロン（Patrick Heron）、ウィリアム・スコット（William Scott）、テリー・フロスト（Terry Frost）、ピーター・ランヨン（Peter Lanyon）の 4 名に焦点を当て、イギリスのカラーフィールド絵画が登場した美術史的背景を考察した。ロンドンのヴィクトリア＆アルバート美術館内の国立美術図書館、大英図書館、テート図書館で資料調査を行った。

次に、イギリスの 3 名のカラーフィールド画家（ジョン・ホイランド、ロビン・デニー、リチャード・スミス）の活動とアメリカ現代絵画やロンドンの都市文化の関係を検討するために、ロサンゼルスのゲッティ研究図書館、ロンドンの国立美術図書館、大英図書館で、展覧会カタログや当時の美術雑誌（とりわけ *Art News and Review* 誌）を中心に調査した。

４．研究成果

これまで、イギリスの画家がアメリカ現代絵画を知ったのは、テート・ギャラリーで開催された「合衆国の近代美術（Modern Art in the United States）」展（1956 年）や「新しいアメリカ絵画（The New American Painting）」展（1959 年）であると言われてきたが、パトリック・ヘロンはその前からアメリカ人批評家クレメント・グリーンバーグ（Clement Greenberg）との交流を通して学び、当時書いていた展評の中でアメリカ美術に触れており、ウィリアム・スコットは 1953 年にアメリカを訪問していたことが分かった。テリー・フロストもその前から間接的に知っていた形跡があり、ピーター・ランヨンは 1957 年にアメリカを訪問して交流を深めていた

ことが分かった。イギリスにカラーフィールド絵画が生まれた背景として、先行するセント・アイヴズ派のアメリカ美術への関心の高まりがあることが分かった。

イギリスのカラーフィールド画家に関して、ジョン・ホイランドは、数多くのアメリカ人美術家に会っていることが分かった。抽象表現主義画家だけでなく、カラーフィールド画家、クレメント・グリーンバーグに会い、とりわけハンス・ホフマン（Hans Hofmann）の影響を受けていることが分かった。ホフマンは、1956 年と 59 年にロンドンで開かれた上記のアメリカ美術展に出品していなかったので、ホイランドにとってアメリカ経験が大きかったことが分かった。

ロビン・デニーは、80 年代にロサンゼルスに滞在するものの、アメリカ美術の影響は主として、1956 年と 59 年にロンドンで開かれたアメリカ美術展によるところが大きく、とりわけマーク・ロスコ（Mark Rothko）とバーネット・ニューマン（Barnett Newman）から影響を受けたことが分かった。ホイランドとは対照的に、デニーは、イギリス国内での経験が重要であることが判明した。

リチャード・スミスは、1959 年から数年間アメリカに住み、抽象表現主義画家やカラーフィールド画家に会い、とりわけケネス・ノーランド（Kenneth Noland）の作品を好んでいたことが分かった。さらには、ポップ・アートにも関心をもち、1961 年にはグリーン画廊で個展を開いていることも分かった。これは、スミスが、後年峻別されるようになってしまった抽象絵画とポップ・アートの双方に関心を持っていたことを示す興味深い事例だと言える。

カラーフィールド画家は、セント・アイヴズ派と異なり、「合衆国の近代美術」展（1956 年）や「新しいアメリカ絵画」展（1959 年）といった展覧会の影響が少なくないことが分かった。

ロンドンの都市文化に関して、明示的な関係は見つからなかった。批評家のローレンス・アロウェイ（Lawrence Alloway）は、1958 年に発表した「芸術とマスメディア」（“The Arts and the Mass Media”）という文章で「ポップ・アート」という言葉を初めて用いたことで知られているが、その前年に、自分たちの世代は、映画やラジオ、挿絵入り雑誌といったマスメディアに衝撃を受けた先行する世代と異なり、物心つく頃からそれらに囲まれる環境があったことを指摘していた。マスメディアに流通するイメージは、リチャード・ハミルトン（Richard Hamilton）の《一体何が今日の家庭をこれほどに変え、魅力あるものにしているのか》（*Just What Is It That Makes Today's Homes So Different So Appealing?*）（1956 年）に代表されるように、1956 年にホワイトチャペル・ギャラリーで開催された「これが明日だ」（This Is Tomorrow）展で参照された。この展覧会には、ヴィクター・パスモア（Victor Pasmore）などの抽象画家も参加しており、抽象絵画と建築の関係は指摘できるものの、アメリカのカラーフィールド絵画に見られるような豊かな関係は認められなかった。1957 年の「ある展示」（An Exhibit）展や 1959 年の「場所」（Place）展でも、鑑賞者の参加やマスメディアとの関係といった「環境」の問題が重視されたが、1960 年の「状況」（Situation）展になると、そうした点は後退して、作品の大きさの方が重視されるようになった。

イギリスのカラーフィールド画家は、先行世代のセント・アイヴズ派の抽象画家と異なり、主として展覧会を通して、抽象表現主義を始めとするアメリカの現代美術の展覧会に示唆を得て、作品の形式的な側面を重視しつつ展開したことが分かった。

本研究は、イギリスのカラーフィールド絵画を抽象絵画の国際的な展開の中に位置付けることで、1960 年代イギリス美術の重要な局面を明らかにするものである。戦後イギリス美術史を修正して、現代美術の複数的な歴史を明らかにしつつ、現代美術がグローバル化する中でイギリス美術が果たした役割を明らかにする点に意義がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　2 件）

① 加治屋健司「グロイスにおける芸術の制度と戦後日本美術」『思想』1128 号（2018 年 4 月）、87-99 頁．査読無

② Kajiya Kenji, “Real/Life: New British Art and the Reception of Contemporary British Art in Japan.” *British Art Studies*, no. 3 (July 2016). 査読有
DOI: 10.17658/issn.2058-5462/issue-03/kkenji
https://www.britishartstudies.ac.uk/issues/issue-index/issue-3/real-life

〔学会発表〕（計　2 件）

① 加治屋健司「テセウスの船としての現代美術」（京都市立芸術大学芸術資源研究センター・國府理「水中エンジン」再制作プロジェクト実行委員会・兵庫県立美術館主催シンポジウム「過去の現在の未来 2 キュレーションとコンサベーション その原理と倫理」、神戸市、兵庫県立美術館、2017 年 11 月 23 日）.

② 加治屋健司「アンフォルム化するモダニズム　カラーフィールド絵画と 20 世紀アメリカ文

化」(「岩井克人先生文化功労者顕彰記念コンファレンス」、東京、一橋講堂、2017 年 7 月 22 日).

〔図書〕(計　1 件)

① 田中正之、林道郎、加治屋健司 他『ニューヨーク　錯乱する都市の夢と現実』(竹林舎、2017 年)、502 頁.

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。